

詩篇 103: 1-4 による説教

わがたましいよ、主をほめよ。
わがうちなるすべてのものよ、
その聖なるみ名をほめよ。
わがたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみを心にとめよ。
主はあなたのすべての不義をゆるし、
あなたのいのちを墓からあがないだし、
いつくしみと、あわれみとをあなたにこころせ。

一九四三年秋

(詩篇 103: 1-4)
愛する教会員の皆さん!! 私たちが今聞いたのは、非常に有名な聖書の御言葉である。「わがたましいよ、主をほめよ」これは、私たち皆、これまでしばしば読み、聞き、かつ歌って来たものである。ここでは、明らかに誰かが自分自身と語っていることに、お気づきであらうか。「わがたましい」とは、確かに、ここで「主をほめよ!」と語っている。その当の人のことである。寸分違わぬ同一人なのである。「わがうちなるすべてのもの」とは、その人の思い、意図、心配、熱情、心、つまり、私たちが今日、精神作用と呼んでいっているようなものでもある。この人は、ちょうど母親が、子供たちを自分のまわりに集めるように、あるいは、士官や下士官が、「こっちへ来い!」といって兵士たちを呼び出すように、自分自身のうちなるすべてのことを呼び集める。そして、彼が自らに、つまり自分のうちなるすべてのものに語るべきことは、ほかでもない、「主をほめよ!」ということである。
私たちは誰しも皆、きっと独り言を言ってきたに違いない。どうして、そうでないはずがあるか。あなたは、

きつと誰もいないところで、「こういう風にしたいのだ
が」と自分に語ったり、「何と間が悪いのだろう」とか、
「あいつは何と悪いことをするのだろう」と自分で嘆く
ことがあつたに違いない。また、それとは別に、恐らく
自分自身に向かつて非難めいたことを言ったり、自分自
身と言ひ争ったり、あるいはまた、自分自身を慰めたり、
呼び起こしたりしてみたことがありであらう。そうい
うことは皆、その時その場所に應じて当然理由のあるこ
とである。

しかしながら、ここで起こっていること、今私たちが
聞いていることは、それとは全く違つたことである。「わ
がたましいよ、主をほめよ!」。もし、これを私たちが
普通自分自身に語りかけるすべての独り言と比べると
ば、それは新鮮なそよ風が、かびくさい塵の中に吹きこ
むようなものである——私たちはここで直ちに何事かを
学ぶことができる、それはすなわち、「聖霊とは何か、
聖霊を持つとは何を意味するか」ということである。よ
く注意せよ、このように、私たちが向かつて、私たち自
身と語りたもうのが聖霊にほかならない。また、このよ
うに、「わがたましいよ、主をほめよ!」と自分自身と
話をするものが、聖霊を持つているのである。あなたは

そのように、自分自身と話をしているか。これは真剣な
問である。何となれば、聖書のほかの箇所にも、「キリ
ストの御霊を持たない人がいるなら、その人はキリスト
のものではない」(ローマ・九)とあるからである。
——しかし、それがいかにあれ、人間がこのように「わ
がたましいよ、主をほめよ!」と言つて、自分自身と語
るところ、聖書は明らかに聖霊を持つている。そこから、
私たちに聖霊が吹いて来る。私たちは回りくどいことを
やめにして、この新鮮なそよ風に吹かれ、伴われ、各人
が自分自身に、「わがたましいよ、主をほめよ!」と共
に語りかけることをしようではないか。

「わがたましいよ、主をほめよ!」、このように言わ
れている、そのことに厳密に注目しなくてはならない。
それは、「私たちが善・美と考えていることについて、
美しき理念をほめよ」と言つていない。また、「力強き
自然をほめよ」とも言つていない。「われらの美しきス
イス、有能で、今日までかく守られて来たその住民をほ
めよ」とも言つていない。「あなた自身を、そのよき良
心を、生活における有能、有益さ、その健康と、その良
き暮らしぶりをほめよ」とも言つていない。「私たちが愛

してやまぬ、あなたの家族、夫や妻、子供や孫たちをほめよ」とも言わない。これらすべてをほめるということにも、やはり十分理由はある。しかしながら、もし私たちが聖書において私たちに語りかける聖霊に従い、聖霊に伴われるならば、私たちに良いと思われるもの、したがつて、もっと良く見ればあまり良くないような一切を越えて——このように美しいものでありながらしばしばやはり醜いものでしかないもの、輝かしいものでありながらしばしば越えて、はるかに高く聖霊は私たちを導いて行くのである。すべてほめ讃えるに値するものを造り、いつまでも、ほめ讃えるように保たれるお方のところにまで高く——ただ唯一の、無条件に、永遠にはめたうべきお方のところにまで高く導いて行く。これが主にほかならない。「わがたましいよ、主をほめよ！」
 「わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。主の「聖なる御名」、それは聖書においては、御自身を告げ知らせ、啓示された神である。つまり、私たちは、自分が編み出したり、考えついた主をほめるのではなく、まことの主をほめることが肝要なのである。それは依然として、妖怪、暴君、いや恐らく悪魔かもしれ

ない。人びとが自分で編み出した主をほめるべきだと考える時、今日の世界において、それがどこに導いて行くかを考えてみよう。あなたが、すべてのものの上なる主として、ほめ讃えているものはどのようなお方であるか、よく注意してみよ。彼は、私たちが自身に解答を与え、その愛する御子において私たちに語られた。私たちはそのことを固守しよう。私たちが自分でやるとひとりの主を求め、こしらえねばならないのではなく、御自らを私たちに与え、御自身への道を示し、開かれた、ひとりの主を持つていることに感謝するように。
 「そのすべてのめぐみを心にどめよ！」「主があなたに恵みをほどこされたことを忘れるな」。忘れるな！ 私たちは皆、多くのことを忘れる、これまでも多くのことを忘れて来た。私たちは昔知っていた名前や顔を忘れる。私たちの生活の中で起こった最も重要な出来事を、私たちの生活のすべての時を忘れてしまう。私たちは皆、昔、学校で学んだ多くの美しいことを忘れてしまった。しかもまた、私たちは残念なことに、良い計画や洞察や、私たちが守らなくてはならない義務までも忘れてしまう。そういうことは悲しむべきことであるが、それは、私たちの存在が全く滅び、過ぎ行くものであることの、明らか

かなしうである。もちろん、ある種のことを忘れることが出来るのは、多くの場合、幸福なことでもある。いつか一つの時が来て、その時には、私たちはすべてを、大きなことも小さなことも一切を忘れてはならないであらう。しかし、その時といえども、私たちが一つのことでは忘れなかつた、ということが一切を決定するであらう。それであるから、「そのすべての恵みを心にとめよ！」主があなたに恵みをほどこされたことを忘れるな」今日、このことを忘れないことこそ必要なことである。

「ほどこされた」とは、主が、後にいつか、將來、あるいは天国において初めて、あなたにほどこされるであらうということではない。私たちは次のことに注意しよう。神が私たちのためにほどこされず、私たちのためにすでに用意されず、準備して下さらなかつた恵みは存在しない、したがって、私たちはそれを、ただ用いなくてほならないだけである。そのことを忘れるな！ そのことを心にとめよ！ もし私たちが、自分たちのために用意されたことに心をとめないならば、それは何の役に立つであらうか。そのことを心にとめよ！ よく見よ、きつとそこに横たわっているものは、薄いほこりの層にす

ぎないのだ、あなたはそれを吹き払いさえすればよい、そうしたら再び、物があなたの前に現われてくるのだ。あるいはまた、それは厚い固まりとなつてゐるかもしれない。それを心にとめるのに、ひとふんばりし、努力しなくてはならないのかもしれない。しかし、たといそのような場合にも、あなたがそれを心にとめるならば、あなたにそのように多くの恵みをほどこされた主をほめ讃えることが、奔流のようにあなたからほとぼしり出るに達しない。

そこで、主があなたにほどこされた恵みについて書いてあることに耳を傾けよう、「主はあなたのすべての不義を許し——あなたのすべての病をいやし——あなたの命を墓〔滅び〕からあがないだし——いつくしみと、憐れみとをあなたにこうむらせたもう」と。愛する教会員の皆さん、これはあなたかも、私たちが山を登つて行くように、たえず上へ上へと上昇して行く、驚くべき上昇線ではなからうか。登つて行けば登つて行くほど、いよいよ境界はあらゆる方向に向かつて自由になり、空気はいよいよ澄んで来て、人はいよいよ喜びに満ち、元氣になる。そうだ、もし今、私がここに語られてゐることについて正しく述べるとすれば、ここに語られてゐる一つ

つのことについて、この上昇の段階のおののについて、別な説教ができるに違いない。今ここでは、ほんの手短に全体を見て、急ぎ進みたいと思う。

第一は、「主はあなたのすべての不義をゆるし」である。このことこそ、神が私たちにお与え下さる第一のものであり、真に最も重要なものであることが、私たちに全くはつきりしているであらうか。それは他のすべてのことよりも重要なのだらうか。私たちが健康であることより、私たちが生計をたてて行くことより、はたまた、スイスに平和が保たれていることよりも、もっと重要なのであらうか。何となれば、私たちが神の前に罪の重荷を負って立たねばならないとしたら、罪が私たちから取り去られることがなく、そのために、神から宣告を受けなくてはならぬとしたら、すべては私たちに何の役に立つであらうか。

来事の中で、繰り返し繰り返し、神の恵みを退けて来たし、神の恵みによってではなしに、自分自身の意志と行爲によって生きようとして来た。そのことによって、私たちは神の敵となり、そのことによって確かにまた、繰り返し返し、私たちの隣人に負い目を負うものになった。何となれば、すべての悪、すべての神との争い、すべての人間との争いは、私たちが自分の生活を神の恵みから取るうとしないうで、自分で支配しようとするところから来る。私たちは、このような悪から、自分自身を自由にし、清めることができない。そこにおいて、私たちは、反駁しえないほどに、そのように生きて来たし、また今も生きているその本質に変わりはない。そこには、弁解も言ひのかれの道もない、ただ、このような私たちの生活は不可能な生活であるという、神の判決があるばかりだ。

次に、主が私たちにほどこされた恵みを聞こう、「主はあなたのすべての不義をゆるし」とある。主は、イエス・キリストとなつてゴルゴタの丘の十字架の上で死なれた当時、すでに恵みをほどこされたことによつて、今も恵みをほどこしておられる。なぜならば、そこにおいて、このことが起こつた。そこで神は、あなたや私の、私たちの罪を一切イエス・キリストの上に負わせられた

のである。そこにおいて、このお方は私たちに代わって、
裁かれる者として立たれた。そして、このお方が死なれ
た時、彼と共に私たちの罪が死んだのである。そこで、
私たちは罪から自由にされた。すべてが全くその通り行
なわれている。私たちは罪人である。神は私たちの罪を
真剣にお取りになる。しかし、神が罪を真剣にお取りに
なるのは、私たちを自由にするために、御子を私たちの
ために渡されるという仕方によってである。

主があなたにほどこされる、このような恵みを忘れる
な！そこで、私たちが自由にされたことがはつきりす
る。あなたが罪人であることを忘れるな、しかし、イエ
ス・キリストがあなたの代りになられたことをも、忘れ
るな。全く謙虚であることを忘れるな、しかしまた、全
く喜びに満ち、慰めに満ちていることをも忘れるな。あ
なたは、その目に神を自由に見ることが出来る。それは、
あなたが神に捧げ、示さなくてはならないもののゆえで
はなく、イエス・キリストがあなたのためになされたこ
とのゆえである。

第二に、「あなたのすべての病をいやし、」そうだ、

あなたはたゞ今、恐らく、私の罪は赦されているのか

もしれないと考えたことである。しかし、そこには、
確かにすべての私の病がある。すべての私のおちいりや
すい、誘惑に対する弱さが、私の過度の熱心・不安・怒
り・ぼさ・興奮がある。私はこれらすべてのことが、自
分自身の中にあることに気づいており、経験している。
たとい気づいていないにしても、確かにほかの人はそれ
を行なっている。これらすべてのことによつて、私は自
分の生活を弱くし、また、ほかの人も確かに同じである。
そのような場所に、私は立っている。たとい私の罪が赦
されても、すべて私の病はそこにあり、そして、毎日毎
日、毎年毎年、次第に苦しみを増す。

主は、あなたのすべての病をいやされる！私たちは
良く聞くようではないか。そこには、「主はいやされる」
とある。いやすとは、言葉の医学上の意味においても、
ただ単に、痛みを取り去るだけではない——それは最低
の場合もしたくはならない——いやすとは、害をなく
し、危険をなくし、持ちこたえるようにすることである。
したがって、私たちは皆本当に病をもつて立っている。
あるいは悪い足、見えない目、腫瘍、傷、目まい、ども
りなど。私たちは皆、お互いにそんな具合になっており、
ほかの人よりはるかに良いといったことはない。しかし

私たちは、このような病をもっていることを否定しようとは思わない。また、まるで他人の病が自分自身のより、もっと重大で興味あるものであるかのように、他人の病を示そうとはかならずしも思わない。

しかし、ここで何か別なことが起こるといふのだ、私たちは、「主があなたのすべての病をいやされた」と聞くことができる。このことこそ、主があなたにほどこされた恵みにほかならない。では、いかにして、そのことをされるのか。神はどのようにして、私たちのすべての病をいやされるのか。よく注意せよ、問題は、きわめて単純なことなのだ。神の前にあなたは、そのすべての病もろとも、たとえそれがどのような病であれ、ガラスのように全く見とおしてあり、あなたをつきぬけて、神は病みつかれた全く別のあなたを、表の冠から血が出た額、十字架の釘で穴のあいた手足、視力を失った眼、ただ、たとえどしく、「わが神、わが神、どうして私をお見すてになったのですか」という口をこらんにする。神は、あなたをとおして、このあなたをこらんにする。全く病みつかれたこのあなたをその栄光をもつて輝かせたもう。神は、か、あなたを見、あなたの病をこらんにする時、神は、このあなたをこらんにする。これこそ、あなたのいやし、あ

わたのすべての病のいやしであることを理解するであらうか。「彼は、私たちの病を負いたもう」。あなたがそのような状態にあつたとしても、あなたの病と争ったり、否定したりすることは出来ない、しかもまた、絶望することもない、その時こそ――

「主があなたに恵みをほどこされたことを忘れるな」。あなたは、いやされたのだ、「イザヤ五三・五」。あなたわれわれは、いやされたことを、真に神によつてすてるな、あなたがいやされたことを、真に神によつてすてにいやすれたことを。

第三に、「あなたのいのちを墓〔滅び〕からあかないだし」。墓とは死、消滅、無である。私たちは皆、死に向かつて進んでいる。私たちは、今、いわば日夜、身近に死の危険にさらされている、無数の隣人のことに心ならずも思いをはせるようになる。しかし、私たちはだま

されないようにしよう。この人たちと私たちの相違は、それほど大きいわけではない。私たちは誰しも、年をとる。そして年をとるといふことは、言ってみれば死に向かつて進んで行くことだ。今日人々は、死というものを子供が生まれるとすぐに始まる出来事としてとらえている。今どこかに木が生えているとする、人はいつかそれから棺をつくるかもしれない。また、どこかに緑の野の一部分があると、それはいつか掘り起こされて墓になるかもしれない。また、いつか時がやって来る、その時には、あなたの友人も親戚もそこに連れて行かれ、あなたは、そのそばにおっても、しかしやがて人があなたも運び去り、あなたは謎に満ちた、生命のない塊に、屍になるであろう。いつかやがて、まだあなたを知っておった、あなたもまた知っていた最後の人が死ぬ時が来るであろう。その時、あなたは一体どうなるのか。それが死である。「死は私たちの終りであって、この終りはいつかやって来る」、このことこそ、確かに私たちが死について知っている、唯一のことと考えられる。

しみである。あなたはそれから逃れることはできない。あなたはいつか死ななければならぬ、そして死ぬであろう、私もそうだし、私たちすべての者がそうなのだ。しかし、私たちは、われらの贖い主は生きておられることを知っている。何となれば、かつて、イエス・キリストとして、私たちの罪のために死なれたその同じお方、私たちの病をになわれたその同じお方が、死人の中から甦えられたのであるから、そこでは、私たちの死もまた殺されたのである。そこにおいて、私たちの命は永遠の生命として明るみに出された。そこにおいて、あなたのためにも、私のためにも、そのような基礎が、過ぎ行くことの無い、死ぬことのない存在として、置かれているのである。あなたは死に対して不安をいだく必要はない。しかし、あなたが眼を閉じる必要もない。あなたは自分をごまかす必要はない。あなたはまた、彼岸についてわざとらしい教えを用意する必要もなければ、他人から説明してもらわなければならない。あなたは、全くただ一つのこと以外に知る必要はない、それは「イエスは生きたもう、そして私もまた彼と共に生きる。死よ、お前の威嚇はもはやどこにあるのか」である。あなたは、ただそのことにのみ信頼しつづける必要がある。その時、あなた

たは喜ぶことができるであらう。ちよんど、バサル・グ
 ルハルトが、「私は不安と困窮の中を行く、私は死にま
 で進み行く、私は墓の中にまで行く、されど、常に私に
 喜びがある」と書いたように、たといあなたが滅びに
 向かつて行くとしても、そのような時にも、喜びに満ち
 溢れるであらう。私たちが、「命を喜ぶ」ことができる
 というのは、全く真実である。それは、俗語に歌われて
 いるように、「まだちっちゃなあかりが、きらめいてい
 るから」ではない。そうではなくて、神がわれらの主イ
 エス・キリストにおいて、私たちが望むことのできる死
 人の甦えり、永遠の命の光を点して下さったからにほか
 ならない。

忘れてはいけな、神は、あなたにこのようないつく
 しみを施されたのだ。そのことを思い起こせ！ あなた
 が死なねばならず、ちり灰とならなくてはならないこと
 を忘れてはいけな。しかし、はるかにもっと忘れてい
 けないことは、イエス・キリストが死人の中から甦えら
 れたということだ。恐るな！ 滅びなければならぬいも
 ののために生きるな、むしろ、あなたがその滅びから救
 われていることを喜べ！

そして第四に、「いづくしと憐れみとをあなたにこ

うむらせ〔冠としてかぶせ〕」である。冠をかぶせると
 は、明らかに、榮譽、輝き、光榮を意味する。「あなた
 に冠としてかぶせ……」？ あなたは、「どうして、私
 がそのようにされるのか。どうして、私が神によって榮
 誉と光榮とを与えられるに値するのか」と言われるであ
 ろう。あなたの言うことは、全く正しい、あなたはそれ
 に値しなかつたし、今後も値することはないであらう。
 学生がよい成績をとったり、スポーツの選手が記録を出
 したりする、私たちに値する榮冠、榮譽、光榮は、時が
 たてばなくなる榮譽、光榮、榮冠であつて、根本におい
 て——紙でできた冠にすぎない。私たちに約束されてい
 る眞の榮冠、榮譽、光榮、それは本来、私たちに値し
 ないものである。

しかしながら、ここでは、眞の榮譽、光榮、眞正の王
 冠が問題なのである。それはまさに、いづくしと隣れ
 みの中に存する。ではどうして、それが、眞正の王冠、
 眞実の、永続する榮譽なのか。いづくしと隣れみとは、
 神の心、最奥の本質だからである。神は、いづくしと
 隣れみとを、あなたに冠としてかぶらせようとしておら
 れる。そのことこそ、神があなたになされた、確かなに
 された良きことなのである。なぜならば、イエス・キリ

スト、すなわち、私たちの罪を負われ、私たちの病を引き受けられた、その同じ方が死人の中から甦えり、天に昇り、幾千もの御使の歡呼の中に、父なる神の右に坐られたからである。見よ、そこであなたもまた、あなたがそこにあるずっと以前に、あの冠をかぶらされていたのである。神がそこでイエスに、すべての名にまさる名を与えられた時、あなたの名前も命の書に書き記されたのである。あなたは榮誉を与えられ、光榮を授けられ、イエスの兄弟姉妹たる神の子らの群れに加えられた、したがって、あなたの全存在は、今や、そこに起こったことの發見以外の何物でもない。

忘れてはならない、神があなたになしたもうた良きこととを忘れてはならない。真正の輝き、神の輝きがすでにあなたの生活の上にあることを忘れてはならない。あなたはそれのことを考えたならば、私たちのあがない、今はまだ隠されている私たちの光榮の現われるのが真近いとを知り、全く謙虛になつてあなたの頭をあげるようになるであらう。

今、私たちは主を、そのように多くの良き事をなして下さつた主をほめ讃える理由のあることを聞いて来て、

終りに近づいた。しかし、今最後にもう一言、一体主をほめ讃えるとは何を意味するかを考えて終わりたい。

私たちは、ほめ讃えるというと、歌うことを考える。事實、そのことは重要である、私たちがこの教会に集まつた時のように、歌うことも問題にはなる。確かに、私たちの歌は、主をほめ讃えている。主がなしたもうた良きことについて歌う場合、特にそうであらう。私たちは、新しい讃美歌の本を手に入れ、その点占いのよりもっと良く手引きがされているのを見て、喜ばうと思う。そして、この新しい本が、「試用版」と名づけられている場合、ただ単に、ここで私たちが何かを試みるのではなく、むしろとりわけ、「私たちが主をほめ讃えることを許されている」とは何を意味するか、私たちが理解しているかどうかを試されるという意味である。さらに若干付け加えるならば、私たちの歌は、それが素直な心から出て、そのような心で口を開き、喜びをもって力強く歌う時、主をほめ讃えるのである。バーセルの教会では全体として、喜びをもって力強く、大きな口を開いて歌うのをめつたに聞いたことがないのには、全く閉口する。このことはいつか言わなくてはなるまい。これは、あまり良い徵ではない。それは変えらるべきではなからうか。神が

私たちに良きことをなさったことを考えるならば、変わらなくてはならないはずだ。

しかしながら、神をほめ讃えることは、ただ単に私たちの歌うことの中にだけ求められてはならない。歌うということは、神が私たちに成したもうた良きことについて、お互いに喜びを示しあおうとすることの徴にすぎない。神は、そのことを私たちが期待しておられる。神が私たちに成したもうた良きことを私たちがなすことより以上、どのような良いことを私たちがなすことができるだろうか。かつて、フリードリッヒ・ニーチェは意地悪く、「救われている者は、救われた顔をしているはずだ」と言った。彼の言うことは正しい。キリスト者の中には、あまりにも氣むずかしい、苦虫をかみつぶしたような顔をした人が多い。しかし、主をほめ讃えることを知っている人がどうして氣むずかしい、苦虫をかみつぶした顔ができようか。あなたには、そのような顔をするわけもないし、そのような顔をするのは良くない。できるかぎり、「主は私に良きことをして下さった」ということを少しでもあらわし、示すようにせよ！

しかし、これでもまだ終りではない。根本的に言って、神をほめ讃えるとは、何かもつと単純なことなのである。

それは、神が良きことをなさった人の存在、生活のことである。あなたがたは皆、「作品が巨匠をほめ讃う」という言葉を御存知であろう。おそろくそれは、職人や芸術家の作品について言ったものである。しかし、あなたがたは神の作品なのである。神は、あなたにかくも多くの良きことをなさったことによって、あなたを造られたのである。そこで、あなたの課題は、端的に神に造られた神から与えられた者となり、ただそのようなものであることに存する。今、神によって賜物を与えられた者となれ。つまり、与えられていない者のごとくなるな。あなたはそのような者になる時、堂々たる声ではなくても、神の讚美を歌うことをゆるがせにしてはならない。たとい完全に現われることはできないとしても、今あなたが置かれた喜びの中に生きることをおろそかにしてはならない。それは何の技術をも要しない。あなたにも、そのことはできる。そして、これこそ神があなたから期待している讚美なのである。

しかしながら、そのことが私たちが人間の中で起こり、いよいよ改善されて行き、真に私たちを通して起こされ、というのには、私たちの選び取ることではない。そのこととは、父、子、聖霊なる神が、私たちの中に、私たちを

通して支配し、造って下さるのである！——では、その
お方に呼び求め、お互いに祈るうではないか。

《終りの祈り》

主なるわれらの神、イエス・キリストにある愛する
御父よ！

もし、あなたが前もって私たちとお語りになったの
でなければ、私たちがお互いに語りあうのは空しいこ
とです。もし、あなたが、それを私たちの心や唇にそ
なえて下さり、私たちの全生活、すべての思いと言葉
と行ないとを、あなたへの讃美とかえ、あなたへの讃
美としてお受け下さるのでなければ、私たちは、あな
たにふさわしい讃美を捧げることはできません。

どうか、あなたがそのようにして下さいませう。お
願い致します。地上のすべてのキリスト教とその教会
が、これまでよりも良く、正しく、力強く、あなたを
ほめ讃えることができるようにして下さい。あなたが
呼び求める者たちに、暗き中に己が道を歩む者たちに、
あなたの隣れみを大いに知らせ、そのことよって、
この私たちの時代のすべての乱れ、分裂し、悩んでい
る人びとの中に、新しい讃美をお備え下さるようお願い

い致します。私たちすべての者に、あなた以外の助け
主はありません。

そこで私たちはこの時代のすべてのうめき、教えき
れないほどの悩める者、死なんとする者を御前に覚え
ます。あなたはこの人びとにも御顔を隠したまいませ
ん——また、すべての為政者たちを、あなたが正しく
裁かれるように——また、私たちの民族、役人、軍隊
など、私たちが目覚めて、善を行なうのにうむことが
ないように——また、教え、教育にたずさわるすべて
の者が知恵と能力に満ちてそれを行なうように——ま
た、すべて悲しむ者、見捨てられた者、病める者、貧
しき者が、助けと慰めなしに捨て置かれないうちに、
と祈ります。ただ、すべてにおいて、すべてを通して、
私たちによってあなたがあらわれますように。その
ことを、イエス・キリストのゆえにお願いいたします。
その御名によってお祈りいたします。
天にましますわれらの父よ……！